

第5章 熟議が高校生と大学生に与える影響

— 熟議事前・事後に実施した自己認識シートによる考察 —

1. 学びの計測の目的

兵庫大学・兵庫大学短期大学部では、学習支援センターを中心に、学生の「学び」をサポートする体制づくりを進めている。しかしながら、日常の学生生活における学生の「学び」の様子を見渡してみると、自ら積極的に学習に取り組み、仲間との連携する姿勢は不十分である。本学だけにとどまらず、今日の日本の教育が抱える課題の一つに、学生の能動的な学修が挙げられるだろう。高等教育機関に入学した学生ですら消極的な学びの姿勢のままであり、議論や討論を通じた他者との協働を通して、自ら問題意識や課題を見つけ、課題を解決しようとする力を発揮していく姿を見ることは難しいことである。

文部科学省が「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）」を推奨しているのも「学び」の姿勢の転換を目指すためであり、さらにその学びは学校教育機関の中にとどまらず、社会全体に広げていくべき「学び」の姿勢であり、問題解決のための手法である。その手法の一つとして、「熟議」を挙げることができるだろう。

熟議とは、多くの当事者による熟慮と議論を重ねながら政策を形成していくことをいう。政策を形成する際に、当事者が集まり、学習、熟慮し、議論をするプロセスが重要であることはいうまでもない。そして、教育機関である兵庫大学・兵庫大学短期大学部としては、この熟議の試みが、参加した本学学生と高校生に対して、どのような効果をもたらすことができたのか、ということに注意を向ける必要がある。現在、文部科学省が目指す「自ら課題を解決しようとする力」を醸成するためであるならば、自分の現状を分析する力や内省する力、つまり学生や高校生たちの主観的な体験に着目して、学生や高校生たちの単なる能力面の伸びではなく、熟議に参加する前と参加した後での自己意識の変化について検討する必要がある。

本章では、このような考え方に立ち、主に熟議の事前と事後に実施した自己認識シートを分析し、熟議が参加者の自己認識にどのような影響を与えたのかを明らかにし、今後の教育の方向性について考察するものである。

2. 調査の方法

(1) 対象

2017年度の熟議に兵庫大学・兵庫大学短期大学部の学生（以下、学生とする）は、ワークショップに7名、ファシリテーターとして13名が参加をした。そのうち、自己認識シートに回答した学生は、ワークショップの参加者が事前、事後ともに7名、ファシリテーターとして参加した学生が事前13名、事後12名であり、学生全体では事前20名、事後が19名であった。参加した学生たちには、各学科教員の方から、熟議の参加を促している。また高校生の参加者は、加印地区にある公立高等学校の生徒32名である。また、なお、過去に熟議に参加したことがある生徒は2名であった。

ところで、第4章にも示したが、参加者の熟議に対する考え方やテーマについての意識の変化について探ることを目的とした、事前のアンケートと事後のアンケートがあった。これらアンケートは、高校生、大学生についても調査の対象としていたが、そのうち、事前アンケートの中には「熟議2017in兵庫大学」に参加した理由を問う設問があった。結果として、複数回答で「学校の先生や、属する段階の関係者から参加を勧められた」が回答者数の40人に対し28件回答があり、回答者に対し70.0%を占めており、多くの参加者が勧められて参加していたことを示したところである。高校生については、事前アンケートに回答のあった28名のうち、「学校の先生や、属する団体の関係者から参加を勧められた」は82.1%となり、全体の場合よりも高く、学校から勧められての参加と回答した生徒が多かったことがわかる。結果を下記に示すが、一方で、「AI×地域～AIで変える加古川地域の未来～」というテーマに関心があるから」も21.4%を占めており、テーマに関心を持っていた高校生も一定数あった。なお、学生については、事前アンケートはワークショップ参加者を対象とし、ファシリテーターを除いた関係から、回答数が少なく、所属別では統計的に意味ある結果を導出することができず、ここでは触れない。

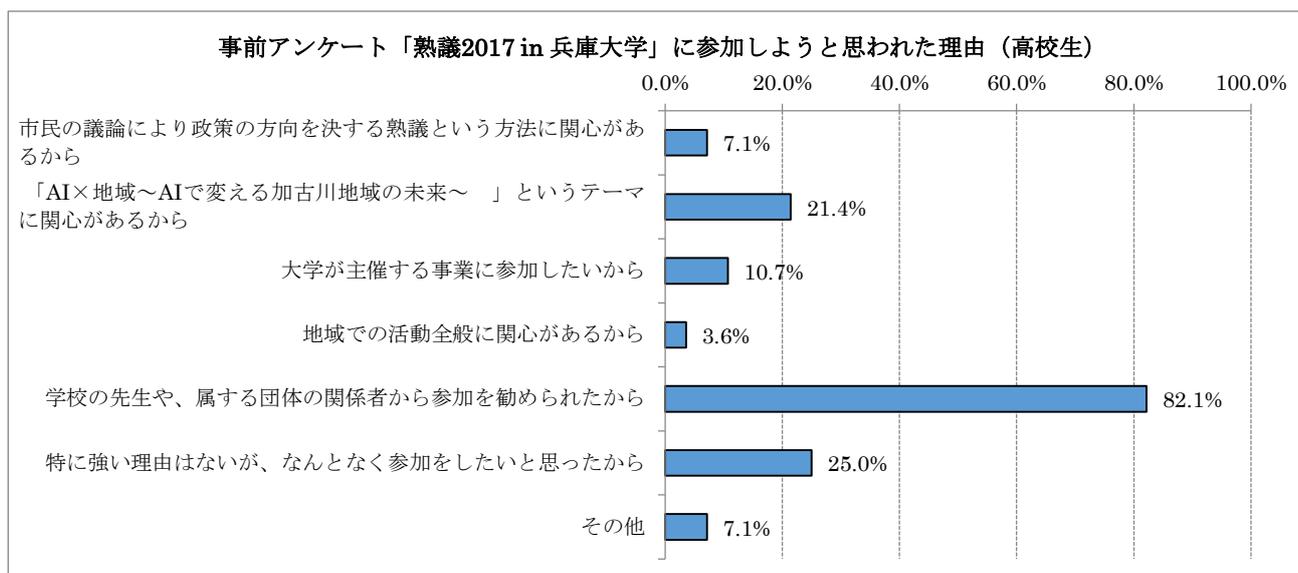


図 5-2-1 高校生が「熟議 2017 in 兵庫大学」に参加しようと思われた理由

(2) 内容

熟議の自己認識シートは、資料編（p106）のとおりである。自己認識シートは、①能力、②能力の説明、③「できること」の具体例、④レベルの4つの欄に分類されて、「下記に記された各能力に対し、今のあなたに当てはまると思われる④レベルの欄の1～5を○で囲んでください。」という設題によって実施される。②能力の説明と③「できること」の説明を詳細に上げているため、設題に対する大学生と高校生との理解度の差の影響は少ないと考えられる。自己認識シートで問われる能力とは、自主性、思考力、実行力、対応力、交渉力、会話力、計画力、規律性、運営力、貢献性の10項目であり、5点満点（5段階解釈）で自己評価するものである。

3. 結果と考察

(1) 学生の自己認識シートからみた自己評価

(N=20)※事前 N=19

能力項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	3.37	3.80	+0.43
思考力	3.05	3.65	+0.60
実行力	3.53	4.00	+0.47
対応力	3.63	4.05	+0.42
交渉力	3.00	3.95	+0.95
会話力	3.37	4.00	+0.63
計画力	3.21	3.65	+0.44
規律性	4.11	4.20	+0.09
運営力	3.68	3.70	+0.02
貢献性	3.26	3.80	+0.54

表 4-3-1 学生全体の自己認識の変化

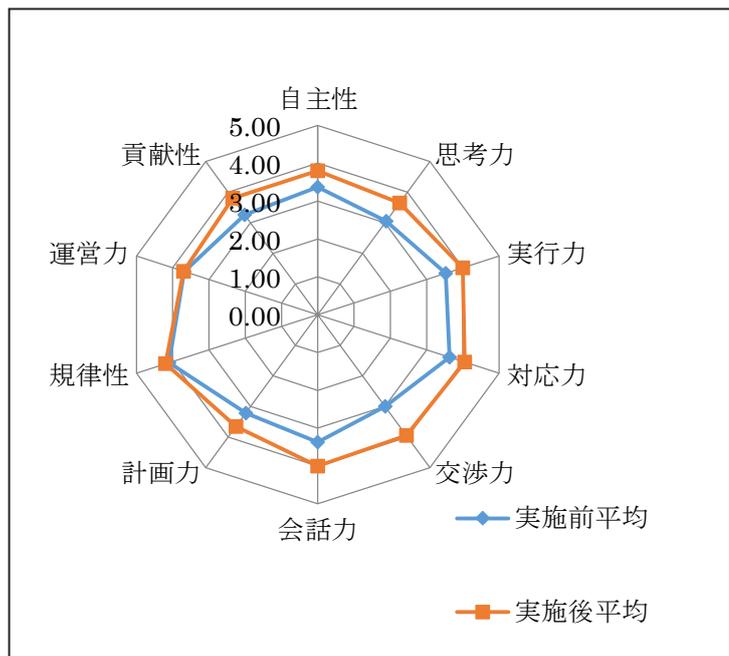


図 4-3-1 学生全体の自己認識の変化

今回の熟議に参加する学生は全員、熟議についての講義を受講、またファシリテーション研修を受けて熟議のワークショップの運営を学んでいる。とはいえ、ファシリテーターとしての参加、熟慮の成果を話し合うためワークショップに参加する学生とはその得た能力等にも相違があると思われる。またファシリテーターとなるか、参加者となるかは本人の申告を基本としており、自己認識によりその選択にも影響があったと考えられる。

【表 4-3-1】 および 【図 4-3-1】 は、熟議に参加し学生全体の熟議の参加前と参加後の自己認識シートの結果である。学生全体の自己認識シートをみると、すべての項目で事後アンケートの方が高い評価を得ており、もっとも高い伸び率が認められたのは交渉力の+0.95である。次に会話力+0.63、思考力+0.60、貢献性+0.54と続いている。高い伸び率が認められた会話力、思考力、貢献性といった項目は、他者との協働が求められる項目であり、受け身の学修では会得できるものではない。「熟議」の能動的な学修方法が学生の意識に変化を与えたと推測することができる。

一方で、学生全体のデータで変化率が低かったのが、+0.09の規律性と+0.02の運営力である。前者の項目はワークショップの参加者となる学生における平均値の増減で、後者はファシリテーターとなる学生での平均値の増減において、唯一マイナスへの変化を示した項目であった。つまり、個人での変化が小さい、というよりも役割の違いにより、変化の方向が異なり、結果、数値上は相殺されたためであると考えられる。以下にそれぞれの詳細を示す。

(N=13) ※事前 N=12

能力項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	3.42	3.77	+0.35
思考力	3.00	3.69	+0.69
実行力	3.33	4.00	+0.67
対応力	3.58	4.15	+0.57
交渉力	2.92	4.00	+1.08
会話力	3.50	3.92	+0.42
計画力	3.25	3.69	+0.44
規律性	4.08	4.38	+0.30
運営力	3.75	3.69	-0.06
貢献性	3.33	3.77	+0.44

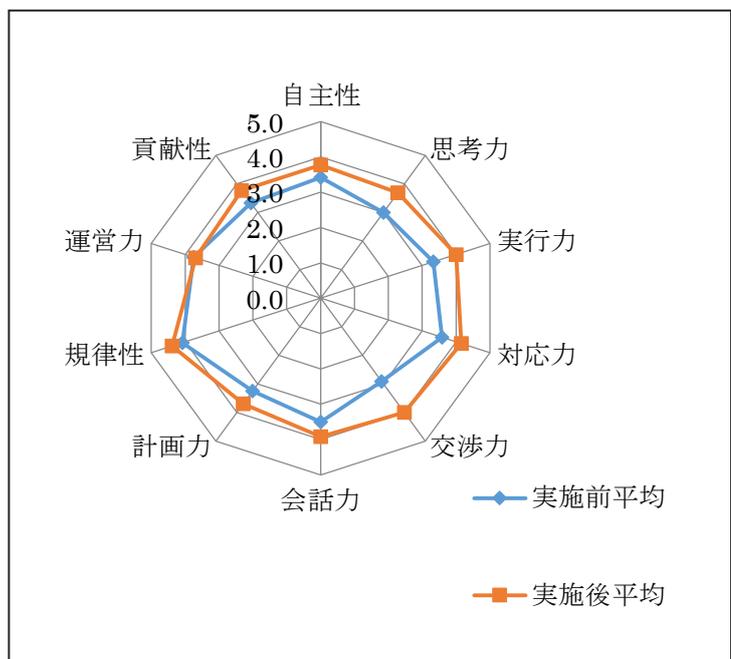


表 4-3-2 ファシリテーターの自己認識の変化

図 4-3-2 ファシリテーターの自己認識の変化

次に、学生の内、ファシリテーターとして熟議に参加した学生とワークショップの参加者として臨んだ学生とに区別して学生の自己認識シートの変化を比較してみる。

【表 4-3-2】 および 【図 4-3-2】 は、ファシリテーターとして熟議に参加した兵庫大学・兵庫大学短期大学の学生の熟議の参加前と参加後の自己認識シートの結果である。

ファシリテーターとして熟議に参加した学生の場合、ほとんどの項目で事後の方が高い評価を得ているが、運営力についてのみ、-0.06と評価が低下している。もっとも高い伸び率が認められたのは交

渉力の+1.08であり、思考力の+0.69、実行力の+0.67、対応力+0.57と続く。反対に、+0.35の自主性と+0.30の規律性が比較的低い伸び率を示している。

ファシリテーターとして参加した学生が最も高い伸び率を示した「交渉力」とは、「人との関わりを踏まえ、働きかけて相互理解へ導く力」であると自己認識シートでは説明している。また、「できること」の具体例としては「取り決めのための話し合いの場を持ち、合意をめざすことができる」、「協力することの意義や理由を、相手に対して明確に伝えることができる」、「周囲の人に対して効果的に働きかける手段を活用できる」の3つを挙げている。また、唯一マイナス変化をした「運営力」とは、違う立場の人々の集まるチームを適切に運営する力であり、「自分の意見を持ちつつも、他者の意見や立場も理解することができる」、「チームの目的を明確にして、メンバーに働きかけることができる」、「異なる立場の人々とも力を合わせて物事を達成することができる」という具体例を挙げている。

ファシリテーターとして参加した学生たちは、「熟議」のグループ討議の中で、参加者全員の意見を聞き、異なる意見をもつグループ構成員の意見を調整し、時には妥協点を探るために考慮を繰り返しながら、グループの見解をまとめていくという活動を通して、グループを運営していく挑戦をしたわけであるが、グループを運営していくためにはまだまだ自らが力不足であると痛感したのではないかと推測することができる。

これに反して、ワークショップへの参加学生の自己認識は様相を異にしている。【表 4-3-3】および【図 4-3-3】は、熟議のワークショップ参加学生の熟議の参加前と参加後の自己認識シートの結果である

(N=7)

能力項目	実施前 平均	実施後 平均	増減
自主性	3.29	3.86	+0.57
思考力	3.14	3.57	+0.43
実行力	3.86	4.00	+0.14
対応力	3.71	3.86	+0.14
交渉力	3.14	3.86	+0.71
会話力	3.14	4.14	+1.00
計画力	3.14	3.57	+0.43
規律性	4.14	3.86	-0.29
運営力	3.57	3.71	+0.14
貢献性	3.14	3.86	+0.71

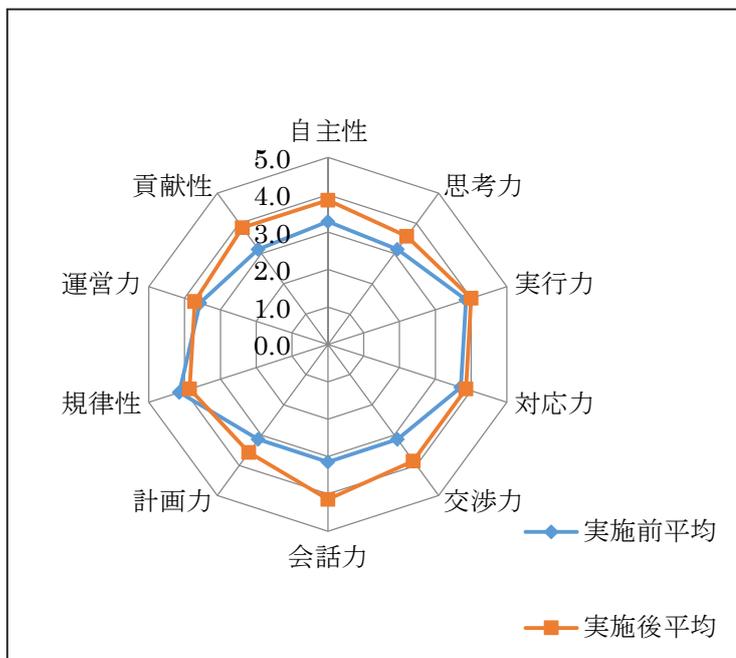


表 4-3-3 ワークショップ参加学生の自己認識の変化

図 4-3-3 ワークショップ参加学生の自己認識の変化

ワークショップの参加者として熟議に参加した学生の場合もまた、ほとんどの項目で事後アンケートの方が高い評価を得ているが、規律性についてのみ、 -0.29 と評価が低下している。最も高い伸び率を示した項目は会話力の $+1.00$ であり、次に同率2位の交渉力と貢献性 $+0.71$ 、自主性 $+0.57$ と続く。会話力とは、「相手と意思疎通を図る力」であり、具体例としては「自分の意見を具体的にわかりやすく伝えることができる」、「相手の意見を丁寧に聞き、素直に受け止めることができる」、「相づちや共感により、相手に話しやすい状況を作ることができる」の3点を自己認識シートでは挙げている。これは、グループの構成員の中でも、高校生よりも年長である大学生としての自覚がこのような点に留意して「熟議」に参加した成果だと推測することができるだろう。そして、ワークショップに参加する学生も、ファシリテーターと同様に、ファシリテーター研修を受けており、その中で会話力に関わる重要な内容を学び、このことが議論の場でも生かされ、事後での自己認識の上昇につながったのではないかと推測することができる。

反対に伸び率の低い項目は、いずれも $+0.14$ の実行力、対応力、運営力の3項目であり、ファシリテーターとして熟議に参加していた学生が唯一減少した運営力もわずかではあるが増加しており、これはグループ討議の運営者であるファシリテーターとの意識の差の表れであると言えよう。また、ワークショップの参加学生が唯一マイナス変化した規律性については、ファシリテーターとして参加した学生は $+0.30$ の増加をしている。規律性とは、「社会のルールや人との約束を守る力」であり、具体例として「社会のルールやマナーの必要性を理解し、それらを守ることができる」、「他者に社会のルールマナー、または約束を守るように促すことができる」、「異なる立場を理解しながら社会のためのルールや約束を結ぶことができる」の3点を自己認識シートでは挙げている。今回の熟議でのワークショップという議論の場では、活発な意見が出ていたように見受けられる。特に、学生たちは普段の受け身の学修態度ではなく、積極的に自らの意見を表出する態度が求められ、それを自覚して活動していたように思われる。その反面、グループの意見調整よりも自らの意見の表出の方法に重点を置きすぎてしまったのかもしれない、という自己評価につながったのではないだろうか。このように、ファシリテーターとして参加した学生とワークショップに参加した学生では、自分の能力の自己認識に違いが認められることがわかったが、それには与えられた役割の違い、また議論の場での役割の相違が、事後の自己認識評価に影響を与えたと推測することができる。

(2) 高校生の自己認識シートからみた自己評価

【表 4-3-4】および【図 4-3-4】は、熟議に参加した高校生の熟議の参加前と参加後の自己認識シートの結果である。

(事前 N=48 事後 N=32)

能力項目	実施前平均	実施後平均	増減
自主性	3.33	3.69	+0.35
思考力	3.21	3.69	+0.48
実行力	3.27	3.78	+0.51
対応力	3.38	3.50	+0.13
交渉力	3.35	3.50	+0.15
会話力	3.65	3.63	-0.02
計画力	3.17	3.59	+0.43
規律性	3.69	4.06	+0.38
運営力	3.15	3.59	+0.45
貢献性	3.29	3.44	+0.15

表 4-3-4 高校生の自己認識の変化

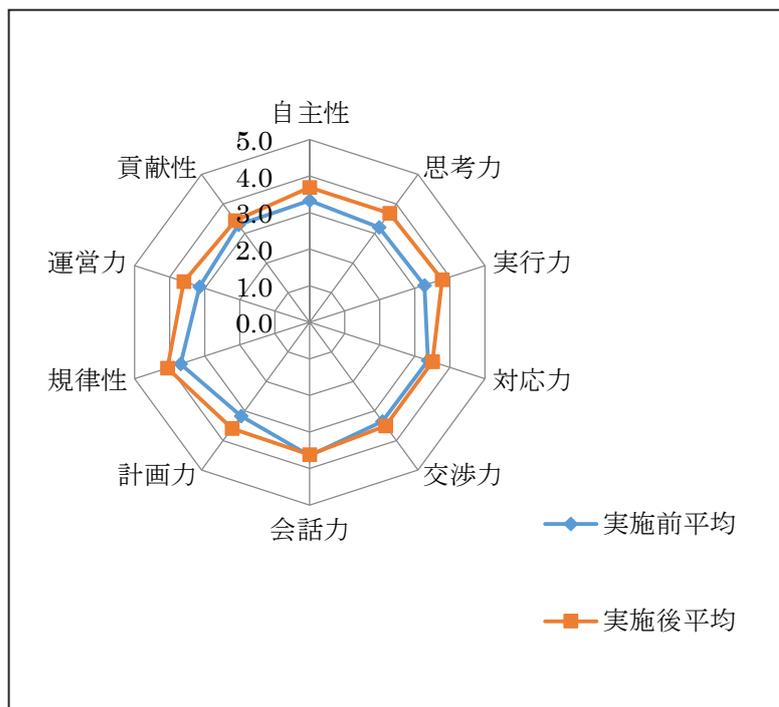


図 4-3-4 高校生の自己認識の変化

熟議に参加した高校生の場合もまた、ほとんどの項目で事後アンケートの方が高い評価を得ているが、会話力についてのみ、 -0.02 と評価が低下している。もっとも高い伸び率を示した項目は実行力の $+0.51$ であり、次に思考力 $+0.48$ 、運営力 $+0.45$ 、と続くが、学生と比較すると全般に伸び率は低い傾向がある。特に、 $+0.13$ の対応力、 $+0.15$ の交渉力、 $+0.15$ の貢献性の3項目が低い値を示した。

高校生たちが最も高い伸び率を示した実行力とは、「目標に向かって行動する力」であり、自己認識シートでは「自分の考えをもち、それらを確実に実行することができる」、「設定した目標達成に向けて粘り強く取り組むことができる」、「困難な状況から逃げずに取り組み続けることができる」の3点を挙げている。この伸び率の高さは、高校生の熟議当日の討論への参加態度だけではなく、事前学習の様子からも納得させられるものである。今回の熟議の取り組みでは、事前学習である熟慮は、講演会とフィールドワークの2つの活動から構成されていた。1つ目の熟慮のための講演会では、講演①AIとその可能性と題して、AI（人工知能）の定義やその可能性について事例を通しての学びを深め、講演②においてフィールドワークの実施方法、地域課題の見つけ方のヒントを説明したうえで、2つ目の熟慮の内容であるフィールドワークへの参加を促した。特に、熟慮（フィールドワーク）では、「AIの活用で解決できるかもしれない」と自ら考えながら、各々選択した箇所でフィールドワークを行い、フィールドワークで地域の課題を見つけだし、その課題を考えるきっかけになった場所や物を収めた写真とその概要をまとめて提出する、ということを課した。おそらく、中等教育ではあまり経験したことのないような課題に取り組み、それを熟議の議論の場で発表し、意見交換をした中で、課題を「やり遂げるこ

とができた」という達成感を感じることができたのではないかと推測することができる。

また、高校生で唯一マイナス変化を示したのは会話力である。会話力とは、ワークショップに参加した大学生が最も高い伸び率を示した項目であった。年齢の近い高校生との差が生じたことについては、大学生や社会人が「自分の意見を具体的にわかりやすく伝え」、時に高校生たちの思いをくみ取って相応しい言語表現に置き換えることが出来ている中で、自らの会話力の未熟さに気づいていった結果なのではないかと推測できる。そうであるならば、今回の「熟議」の試みは、高校生にとっても意義深いものになったと言えるのではないだろうか。

(3) まとめと今後の課題

ファシリテーターとして参加した学生、ワークショップに参加した学生、高校生の自己認識シートからみた自己評価について相違点をまとめておく。

3者ともおおむね自己認識シートによる自己評価はプラス変化となっており、熟議の中での他者との協働した活動を通して、自らの成長の糧となったことが推測される。しかし、3者が最も高い伸び率を示した項目、マイナス変化を示した項目はそれぞれ異なった。そこからは3者が「熟議」で求められた役割や参加者としての意識の差、事前学習を通して得られた学習の成果が反映された、と考えられる。

前述の通り、兵庫大学熟議手法では、①熟慮の段階、②議論の段階、③共有の段階、④振り返りの段階、⑤活動の段階の5つの段階を踏む。

事前学習である、①熟慮の段階でどれだけ熱心に参加するかによって当日の、②議論と③共有の成果に差が生じるであろう。今回の熟議に参加した上述の3者はそれぞれの立場から事前学習に取り組んだと思われる。ファシリテーターとして参加した学生は、今回のテーマであるAIに関する講義を受け、さらに当日の、②議論と③共有を効果的に進めるための方法・技術を高めるための研修を受け、ファシリテーターの自覚をもって当日に臨んだ。またワークショップに参加した大学生は、熟議の講義で学んだうえで、フィールドワークを行い、当日の②議論を活発にするための心構えを持って参加した。ただし同じくワークショップに参加した高校生との間には、今までの学びと経験の差があること、特に学生の場合は、全員が事前にファシリテーター研修を受け、ワークショップの進め方に自信を持って臨んだことなどから、それが当日の②議論と③共有の活動で、高校生の参加者との差となり、自己評価の差につながった、と推測できる。

今回の「熟議」の事前・事後の自己認識シートの分析からは、高校生の参加者は当日の①熟慮の成果と②議論と③共有に高校生の立場からは十分な成果を示したと言える。②議論と③共有の活動で自分が未熟だと感じた能力に気づき、同じグループの参加者からの議論の手助けを得て、その能力を伸ばす手掛かりを見つけていったことが推測される。当日のワークショップに参加した学生たちもまた、①熟慮及び②議論と③共有の活動を通して、自分の意見の表出だけではなく、グループ全体の気づきや見解の

共有が大切である、という一段階上の学びに気づいたことは大いなる成長であったと思われる。そして、ファシリテーターとして参加した学生はグループ全体の調整役だけではなく活発な議論のモチベーションを高め、維持する大切さと困難さに気づいたことであると思われる。熟議は、こうした三者三様の学びの過程に効果的な刺激を与えられたものとして評価しても良いと考えられる。

熟議の今後の課題としては、事後の④振り返りと⑤活動を、熟議以降も持続していく手法の開発である。年に一度の熟議の活動にとどまるだけではなく、せっかく熟議で得られた成果を、参加者自身が日常の学びの中で体現していくだけではなく、その後も参加者たちが持続できるような仕組みを生み出していくことができるのが望ましいと考えられる。今回の熟議で参加者から提言のあった事項を具体化するプロジェクトの立ち上げや議論の継続も一例である。また、リカレント教育としての学習の場の提供でも構わない。一過性のイベントで終始するのではなく、熟議の提言を活かして、何らかの形で兵庫大学・兵庫大学短期大学部も変革した姿を見せることが、参加者の学びの成果を持続することにつながるのではないかと考える。高校生、大学生だけではなく、変化が求められるのは、兵庫大学・兵庫大学短期大学部もまた同様なのである。

(杉田律子)